

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 ヘミングウェイ・テキストにおける身体表象分析
—権力・棄却・パフォーマンスティヴィティ

氏 名 古谷 裕美

論 文 内 容 の 要 旨

本研究においては、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の極めて初期の作品から遺作に至るまでの作品を横断的に分析対象とし、その中で圧倒的な異質性を放つ「逸脱した身体」を研究対象とする。特にジェンダー・セクシュアリティ研究の観点から、主流から「棄却」されてきたテキストの再読や「オブジェクト」として描き出された「逸脱した身体」に焦点を当てて分析を展開し、ヘミングウェイ・テキストにおける新たなクイア・セクシュアリティ解釈の広がりや逸脱した身体表象がテキストに及ぼす効果について論じる。

ヘミングウェイの描く「逸脱した身体」はハードボイルドな作風を体現するかのごとく、時として冷血なまでにグロテスクで残酷な姿をさらし、またある時には「物」のように扱われ、様々な意味記号を反映する鏡のような描かれ方をしている。傷病や損壊、身体変容によって逸脱した身体は、いわゆる「従順ではない身体」として描き出され、その多くは権力や権威からの抑圧や抵抗を表現する手段として描かれており、ジェンダー・セクシュアリティの逸脱性や去勢不安、倒錯性などと関連付けられる場合が多い。本研究において、逸脱した身体に着眼する理由は単に周縁化された身体表象に日の目を当てることを目的とするわけではなく、こうした逸脱した身体がヘミングウェイ作品の主題と密接に関連して描き出されている点に着目し、一見不可解な身体描写を再分析することで作品の主題をより深く解釈することが可能となると考えるからである。本研究においては、一般的な論評から排除されてきた解釈やテキストの再評価を提示し、主流とされてきたテキストや登場人物を対象としたセクシュアリティ研究によるヘミングウェイ作品研究の行き詰まりを打破することを試みる。

まずは、ヘミングウェイ作品の主要研究の変遷をたどり、本研究の位置づけを定義する。1980年代までの研究の動向としては、主として「コード・ヒーロー」(code hero) と呼ばれる法や社会規範に背いて、自身の掟にのみ従って行動する反逆的ヒーローが体現する「男性性」に関して論じられる傾向が見受けられた。しかし、1986年に規範から逸脱した性を扱った遺稿『エデンの園』(*The Garden of Eden*) が出版され、ヘミングウェイのオリジナル原稿分析が可能

となったことから、ヘミングウェイ作品並びに作家自身のジェンダー・セクシュアリティを問う研究が展開されるようになった。

1980年代後半以降のヘミングウェイ作品に対する初期のジェンダー・セクシュアリティ研究では伝記研究が主流であり、その代表的なものとしてはジェンダーやアンドロジニー（両性具有）に着目したケネス・リン（Kenneth Lynn）の『ヘミングウェイ』（*Hemingway*, 1987）とマーク・スピルカ（Mark Spilka）の『ヘミングウェイの両性具有との闘い』（*Hemingway's Quarrel with Androgyny*, 1990）を挙げることができる。リンとスピルカは、ヘミングウェイ家における抑圧的な母グレース（Grace）の存在に着目し、グレースが夫を支配し、幼少期のヘミングウェイに一つ違いの姉と同じフリルの衣装を着させて双子のような恰好をさせていたという伝記的事実をヘミングウェイとその作品に見られる男性性の揺らぎや性的コンプレックスの遠因であると結論付けている。

リンとスピルカの先行研究を受けて、ジェンダー・セクシュアリティ研究という観点から、90年代以降はヘミングウェイのテキスト分析が進められた。その先駆的なものとして、ナンシー・カムリとロバート・スコールズ（Nancy R. Comely and Robert Scholes）は共著『ヘミングウェイのジェンダー—ヘミングウェイ・テキスト再読』（*Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text*, 1994）において、公刊されている作品に加えて、未発表原稿を含むヘミングウェイ・テキストの分析を行い、性役割の交換や異人種混交、レズビアニズムやホモセクシュアリティなど踏み込んだ研究を介して、いわゆるマッチョな白人異性愛作家としてのヘミングウェイ像を瓦解させた。

カムリとスコールズ以降、デブラ・モデルモグ（Debra Modellmog）は『欲望を読む』（*Reading Desire*, 1999）で、作者ヘミングウェイのペルソナとその作品が、いかに読者もしくは社会の強制的異性愛のイデオロギーに影響を受けているかという点について論じた。身体表象分析に関して、モデルモグは身体に刻み込まれた「戦傷」や「傷」がヘミングウェイ・テキストにおいては性化されていると指摘し、「傷」が過度にエロス化されて描き出される場合もあれば、「去勢」や「男性性の喪失」を示唆するものもあり、「傷」が登場人物のジェンダーやセクシュアリティと関連付けられている点を指摘している。モデルモグの表象分析ではその大部分が主要なテキストならびに中心的な役割を果たす男性登場人物を対象とし、主に「男性性」に焦点を当てて身体表象分析が展開されている。

モデルモグが『欲望を読む』を出版したのと同年に、カール・エビィ（Carl Eby）は『ヘミングウェイのフェティシズム』（*Hemingway's Fetishism*, 1999）を出版し、ヘミングウェイの生涯とその作品において、いかにフェティシズムがアイデンティティとジェンダーの構築の重要な要素となっているかについて論じている。フェティシズムが現れる際には、主要な主題、シンボリズム、ファンタジーが出現すると指摘し、「髪」に代表される種々のフェティシズムは抑圧的な母親からもたらされた「去勢不安」が根源的な原因となっているとみなしている。エビィの分析対象の大半が「髪」や「人種越境性を暗示する過度の日焼け」に対するフェティシズムなど身体表象に関わるものであり、精神分析の立場から身体表象分析を行っている。

その他の特筆すべき、ジェンダー・セクシュアリティ研究については、「男らしさ」や「男性性」に着目した論考が見受けられ、リチャード・ファンティナ（Richard Fantina）は著書『アーネスト・ヘミングウェイ—男らしさとマゾヒズム』（*Ernest Hemingway: Machismo and*

Masochism, 2005) において、女性に対して従属的で自虐的な男性登場人物に見受けられる自虐的美学を分析している。また、トーマス・ストリーキャッシュ (Thomas F. Strychacz) は『ヘミングウェイの男らしさの劇場』(*Hemingway's Theaters of Masculinity*, 2003) において「男らしさ」を示すジェスチャーを分析しつつ、「男性性」が常に揺らぎうるものであることを指摘している。ファンティナとストリーキャッシュの研究は、いずれもジェンダーとパフォーマンスという視点から分析を展開している。

上記に挙げたものが代表的なヘミングウェイのジェンダー・セクシュアリティ研究になるが、本研究の身体表象分析という観点から、モデルモグとエビィの研究視点に近いと言えるが、本研究の独自性はいわゆる主流とされたテキストだけでなく、これまで着目されてこなかったテキストや中心的ではない登場人物も分析対象とし、いわゆる「健全ではない」ない身体、特に逸脱性を刻みこまれた身体を分析対象としている点である。次に提示するジェンダー・セクシュアリティ研究やジェンダー・パフォーマンス研究といった観点から、テキスト分析を掘り下げ、ヘミングウェイ・テキストの新たな解釈可能性を提示する。

具体的な分析手法の一つとしては、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の提唱する「アブジェクション」という排除の心的メカニズムという観点を導入する。「アブジェクション」とは、前=エディプス的な一時的ナルシズムの状態において、内部と外部、自己と他者の分離が生じていない母と子の共生状態を想定した排除の心的メカニズムを指す。いまだ対象 (objet) とならず一体化している母という前=対象 (abjet/ abject) が母子融合の「快楽」で魅惑しながらも、同時に「嫌悪」や「不安」を誘発するおぞましきもの (abject/ abjection) となって「棄却」されることを意味する。クリステヴァによれば、母の身体を「棄却」することで、自然と文化の最初の切れ目を生み出すことが可能となるとみなされている。つまり、言語記号による社会の形成は、「アブジェクト」としての母の身体を反復的に棄却することで可能となるのである。しかし、排除されたはずの前=対象 (アブジェクト) は「怖れ」や「不安」を掻き立てる存在として回帰してくる可能性があるとされ、「アブジェクト」は「魅惑」と「恐怖」という両義性を内包する存在としてみなされている。この「アブジェクト」という概念を、本研究全般を貫く研究の柱として分析を展開する。

さらに、ジュディス・バトラー (Judith Butler) はクリステヴァの「アブジェクト」の概念を援用し、ジェンダーのパフォーマティヴィティと関連付けて持論を展開している。バトラーは『問題なのは身体だ』(*Bodies that Matter*, 1993) の中で、物質と言語の関係性に着目し、「物質化」(Materialization) という概念を提唱し、実体としての「物質」ではなく実体であるとされることによって「物質」と呼ばれるものが実体化されていく過程について論じている。本研究ではバトラーの「物質化」という概念を援用し、「アブジェクト」として棄却される様々な身体が常に反復的に言説によって書き込みがなされ、「おぞましき実体」として構築されていく過程を明らかにする。加えて、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) の身体・権力論を援用する。フーコーは著書『監獄の誕生』(*Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, 1975) において、近代資本主義の要請によって労働を組織化するために、主体として社会システムに従属する規範的な「身体」が生み出されていると論じている。「従順な身体」は権力が個人によって内面化され、自己規律的な権力として作用することで作り出されている。フーコーの理論を用いて、人々の精神に深く浸透する権力構造と規律的な「身体」の関係性を読み解き、そこから逸脱した「身体」がいかに「アブジェクト」として描き出されているかについて

論じる。

こうしたクリステヴァの「オブジェクト」やバトラーの「パフォーマンスティヴィティ」、フーコーの「自己規律的な身体」という概念は、主流とされてこなかったヘミングウェイ・テキストや人物表象分析において、新たな解釈の可能性を模索し、テキストの再評価を提示する上で有用であると考えられる。本研究では特に「社会の穢れとしての女の身体」、「瘡痕に侵された脚」、「切断された身体」、「妊婦の身体」、「損壊死体」、「病んだ身体」などの「オブジェクト」として棄却される身体に着目し分析を進める。

各章の内容は次のとおりである。第1章では『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)を研究対象とし、逸脱的なパフォーマンスを行う女性の中性的な身体が「汚穢」として棄却される過程を男性器への戦傷に苦悩するジェイク・バーンズ (Jake Barnes) の語りの効果と関連付けて考察する。第2章では「キリマンジャロの雪」("The Snows of Kilimanjaro," 1936)を取り上げ、心身ともに去勢化され「おぞましきもの」として描き出される男性の身体表象と、トルコに関するステレオタイプ表象が交差的に描き出されることの象徴性を読み解く。第3章では「神よ陽気に殿方を憩わせたまえ」("God Rest You Merry Gentlemen," 1933)を研究対象とし、男性器を自身で去勢する少年の身体表象を「オリエンタリズム」に基づくイスラム教の宦官のイメージや男性同性愛と関連付けて分析する。

第4章では、「インディアン・キャンプ」("Indian Camp," 1925)に着目し、「オブジェクト」として表象される瀕死のアメリカ先住民族妊婦の身体を分析対象とする。女性の身体をめぐる白人医師とアメリカ先住民族男性との間の権力闘争、ならびに先住民族妊婦の身体が圧倒的な他者性を帯びた身体として表象されることで、白人少年のアイデンティティ形成に及ぼす影響について分析を進める。第5章では『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)に登場し、難産の末に死亡する妊婦キャサリン・バークレー (Catherine Barkley) の身体表象を分析する。「オブジェクト」として描き出される妊婦の身体がパートナーの男性性の揺らぎに関与している点について論じる。

第6章では、「アルプスの牧歌」("An Alpine Idyll," 1927)を研究対象とし、特異な物語構造や削除された箇所をオリジナル原稿調査に基づいて分析し、「オブジェクト」としての女性の損壊遺体がどのように表象され、テキストにどう影響を及ぼしているかという点について論じる。第7章では、スペイン内乱を題材とする五つの短編群の一つである「蝶々と戦車」("The Butterfly and the Tank," 1938)を分析対象とする。社会の規律を乱すような悪ふざけをしたことで「オブジェクト」として棄却されたフリット・キングの身体表象に関して、スペイン内乱期における権力構造の変化や、ヘミングウェイの政治スタンス、1930年代の社会情勢などを鑑みて分析を進める。第8章では『エデンの園』を研究対象とし、社会的規範を逸脱したキャサリン・ボーン (Catherine Borne) が「オブジェクト」として棄却されるプロセスや、編集段階において、オリジナル原稿から顕著な性的逸脱性を提示するニックとバーバラが棄却された背景を分析する。本研究では「オブジェクト」として描き出される様々な「逸脱した身体」が棄却されることを介して、どのような意味作用が生まれ、またそのような棄却が行われなければならなかった背景について分析を進める。